

# 練習日誌 6/16&6/17

## 2017年6月16日 『あと7日』

法政大学アカデミー合唱団  
Early Summer Concert



タイトルは、新装なった法大市ヶ谷キャンパス、富士見ゲート地下2階の多目的ホール「オレンジホール」の正面横に掲げられたボードの文字です。

練習開始前に、1人の学生が丁寧に書いていたもの。言わずと知れたアーリー本番までの日数です。チケットの品不足と言ひ、今年のアカデミー合唱団はこれまでにない意気込みを感じます。OBも平日にもかかわらず多くのメンバーが参加しての練習、テナーのY氏にいたっては有給休暇を取っての参加とのことでした。

今日は18:30から体操・発声、次いで19:00～21:00と小久保先生の指揮で合同ステージの練習でした。曲目は先週からの予定に従い「くちびるに歌を」から。全体の流れは分かったはずとのことで各フレーズに区切り、特に「言葉のニュアンスの違い」を考えさせられたレッスンでした。例えば32小節や110小節の3つ目のフレーズでは、「誰のため」でもない、ひ・と・の・た・め・にも～、の「ひとのため」とはどう歌うべきか、そこには優しさがあるはず、と…。

次いで「中田喜直の四季」。同じように曲全体の中での各フレーズの意味を感じるようにと、《雪の降る街を》の男声パートの出だしを、左右の足に重心を変える、すなわち雪道を踏みしめるように歩きながら歌うレッスン、《さくら横ちょう》の「その後どう」では、作曲者が二重母音を装飾音符にした意味を考え、優しく訊ねるニュアンスを忘れないでなど。然り、の思いでした。

最後の「フィンランディア」では、二つの強いメッセージがありました。1つは、現役もOBも極力暗譜で！持ってもいいが眺める程度で、とのことです。32小節と少し、これはやらなければとの思いにさせられました。

2つ目は、歌声を響きの上に乗せていくとの指導です。つまり、合唱は吹奏楽団に対し声量で対決して勝てない、吹奏楽は編成上横の壁と後の壁を”響き”に使う、それで天井には我々の“歌の響きの余地”を残しているとのことです。これは吹奏楽を6年、合唱を10年以上やっている自分も考えなかった視点で、目から鱗の思いでした。

来週木曜の慶應日吉キャンパスでのゲネプロには信長先生も来られるとのこと。我々初の吹奏楽団とのコラボレーション、先生に喜ばれる演奏をしたいものです。

Ten.PM



次回の練習は合同曲のGPになります。

18時30分～ 発声 場所：慶応大学（日吉キャンパス）  
19時～ GP お仕事の先輩も頑張って駆けつけてください。  
20時30分 終了予定



## 2017年6月17日 東中野 桜山キリストの教会

冒頭の「はる」に全神経を集中。

17日の練習は「心の四季」のGPでした。

最初に1曲づつ練習を行い注意事項を確認し、最後に全曲を通してGPは終了しました。

今回も久邇先生や尾崎さんからの指摘は今までの練習で指摘されたことばかりのような気がします。特に1曲目の練習には毎回一番時間をかけており、特に注意を払わなければならないと思いました。

今回選曲が「心の四季」に決まった時、喜んだ方も多かったのではないのでしょうか。自分も高田三郎の「水のいのち」は何度も歌ったことがありますが、「心の四季」は初めてです。今までは自分の練習不足もあり言葉と音を取るのに精一杯でしたが、ここにきてようやく言葉の意味を感じるようになりました。やはり、「心の四季」はいいですね。皆さんもいろいろと感じているのではないのでしょうか。

1曲目でいえば、春の部分の「はる」、夏の部分の「それだけ」、冬の部分の「ゆき～」など練習ではPPやPPPにしろという指示があります。今まではただ小さくしようと思っていましたが、言葉の意味を考え感情を入れると自然に音量は小さくなると思います。本番まで1週間を切りました。各自が今までの指摘事項を確認し、ただ歌うのではなく、いかに感情をこめて歌うことが出来るか。それが出来た時素晴らしい演奏になるような気がします。

演奏会まではまだまだ時間はあります。私もできる限り時間を作り曲を理解し、自分なりの「心の四季」を歌いたいと思います。

BASS KY



演奏会当日のフロント運営を今回参加の若手OBに協力をお願いしております。よろしくお願い致します。

法政大学アカデミー合唱団 OB会